

表千家北山会館 特別展  
千家十職 茶の湯の木工と塗り物 細工  
一閑張細工師・飛来家と指物師・駒澤家  
～茶の湯工芸の伝統と創造～

2005年10月8日(土)～12月4日(日)

開館時間 9:30～16:30 (入館は16:00まで)

毎月曜休館 (10/10 開館・翌10/11 休館)

主催：表千家北山会館・京都新聞社

後援：京都府・京都市・京都府教育委員会  
京都市教育委員会・NHK 京都放送局

～館内のご案内～

---

□ 3階 特別展展示会場

---

□ 2階 展示室・立礼席  
呈茶席

---

□ 1階 受付・休憩所(喫煙コーナー)・電話

---

□ 地階 各家資料ならびに古文書資料展示

清友ホール <ビデオ上映>

「飛来一閑氏と熊倉功夫氏の対談」 (約23分)

「駒澤家後見人と熊倉功夫氏の対談」 (約26分)

上映時間 10:00～ 繰り返し上映 (15:40 終了)

※ 尚、10/15・10/22・10/29・11/5・11/12・11/19は  
ビデオ上映がございません。予めご了承ください。

---

※ 本会期中に展示する全ての道具を記載しております。会期中頃に、  
道具入れ替えを予定。尚、一部の道具については、途中入れ替える  
場合がありますので、予めご了承ください。

掛物	元伯宗旦筆 「飯後軒」		
	元伯宗旦筆 「一閑」	江南野水碧於天 中即似白鷗我	
	元伯宗旦文狂歌入		
	清巖宗渭和尚筆 「朝雪」	一閑求別稱擇二字為號	承応甲午(1654年)
	初代一閑筆 「煮雪」		
	初代一閑筆 望郷詩	孤煙生曠 野落日照平 云々	寛政戊午(1798年)
	初代一閑書 五言詩	五老峰為筆 羊瀾作硯池 云々	
	初代一閑筆 「明月」		
	大綱宗彦和尚筆	飛来一閑翁の落髪をいはふとて 云々	
	宙宝宗宇和尚筆 「朝雪」		(1826年)
	啐啄齋筆横物 「一閑」		
	了々齋筆横物	何事も 悪事さいなん 申の暮れ 福祿寿命 酉のとし哉	(1812年)
	初代利齋筆 辞世	ふけハ行 ふかねはゆかぬ ちりあくた 風にまかする 我身なりけり	
	初代利齋筆 辞世	そく(即)仏の 細工はこゝぞ かねてより あてを枕に さいづちの音	
	啐啄齋筆 書状	六代利齋宛 一筆申入候 時分柄薄暑 趣之處 云々	
	啐啄齋筆 書状	利右衛門(六代利齋)宛 別儀にて遅候 然者 如心好 云々	
	宗左(啐啄齋)、宗員(了々齋)筆 書状	利齋(六代利齋)・茂兵衛(七代利齋)宛	
	了々齋筆 「利齋」二字(狂歌添)		(1811年)
		厄病の かみをはらふて 今日よりハ 心すゝしく 利徳円満	
	七代利齋(曲尺亭)筆	寛政五年...筑波山此面 云々	
	春齋(七代利齋)筆 辞世	世の中ハ生てしぬる物とかや たゝなもかも上へまかせむ	
	十一代利齋筆 辞世	寸法の 限りある我命 取納たりも あわれなりけり	
	富岡鉄齋筆 書状	十一代利齋宛(粽ノ絵)	
	富岡鉄齋筆	十一代利齋の死を悼んで 極楽で茶の湯をすると馳せゆきて..	
	十三代利齋筆	玉ノ絵	
花入	籐組油竹手付蟬籠花入		10代一閑作
	利休好桂籠花入写		11代一閑作
	宗全作手付置籠花入写		11代一閑作
	楓手付置籠花入		11代一閑作
	籐組舟花入		12代一閑作
	ブリブリ籠掛花入		14代一閑作
	掛置籠花入	半床庵好	一閑作
	手なし宗全置籠花入		一閑作

花入	竹一重切花入	吸江斎銘「常盤」	古稀作	利斎作
	竹一重切花入	即中斎銘「緑毛」		14代利斎作
	手付籠花入			13代利斎作
香合	菊香合		随流斎判	初代一閑作
	兜巾香合	元伯好	啐・斎判	10代一閑作
	桃香合	元伯好		11代一閑作
	烏帽子筥香合	元伯好		一閑作
	木彫結文香合	七種ノ内	覚々斎好	10代一閑作
	木彫分銅香合	七種ノ内	覚々斎好	10代一閑作
	木彫くわら香合	七種ノ内	覚々斎好	10代一閑作
	木彫州浜香合	七種ノ内	覚々斎好	14代一閑作
	木彫瓢香合	七種ノ内	覚々斎好	14代一閑作
	伝来写 アマカラ香合		(如心斎 150年忌 記念)	12代一閑作
	武蔵野香合		啐・斎好	11代一閑作
	木彫末広香合		了々斎好	10代一閑作
	籠地鍔塗烏帽子筥香合		碌々斎好	12代一閑作
	烏帽子筥柳張柳蒔絵香合		惺斎好	一閑作
	朱亀香合		惺斎好	13代一閑作
	八卦香合		惺斎好	13代一閑作
	青貝百合香合		惺斎好	14代一閑作
	青貝鳳凰丸香合		惺斎好	御大典 14代一閑作
	燕香合 内朱金砂子		而妙斎好	16代一閑作
	秋野辺香合		而妙斎好	16代一閑作
	溜塗木彫菊香合		半床庵好	13代一閑作
	木彫塗分兜香合			11代一閑作・12代補画
	黒溜内朱鴛鴦香合			11代一閑作
	ハジキ香合			11代一閑作
	丸香合 甲ニ寿ノ字			11代一閑作
	菊蟹香合			12代一閑作
	半月香合			13代一閑作
	ブリブリ香合 鶴松竹梅ノ絵			13代一閑作
	八角香合			14代一閑作
	四方香合			14代一閑作
	木彫瓢箪形香合		了々斎好	利斎作
	華竹筏香合		了々斎好	利斎作

香合	乱桐香合	了々齋好		利齋作
	椿ノ絵丸香合	惺齋好	大正 6 年	13 代利齋作
	梅ノ木松竹唐草蒔絵丸香合	惺齋好	大正 14 年	13 代利齋作
	銀縁桐嶋台香合	惺齋好	大正 14 年	13 代利齋作
	宮島製楓丸香合 琵琶ノ彫	惺齋好	昭和 2 年	13 代利齋作
	宝尽絵蛤香合	惺齋好	昭和 4 年	13 代利齋作
	紅葉ノ木吹寄蒔絵香合	惺齋好	昭和 4 年	13 代利齋作
	葵蒔絵寄木香合	惺齋好	昭和 6 年	13 代利齋作
	桐木地菩提樹蒔絵くわら香合	惺齋好	昭和 8 年	13 代利齋作
	松丸香合 惺齋「高砂」ノ文字	惺齋好	昭和 9 年	13 代利齋作
	春慶桐蒔絵丸香合	惺齋好	昭和 11 年	13 代利齋作
	桑五三桐香合 豊公手植ノ木ヲ以テ	惺齋好		利齋作
	橘ノ彫四方香合	即中齋好		13 代利齋作
	ブリブリ香合		即中齋判	14 代利齋作
	自筆ツボツボ丸香合 塗	而妙齋好 (惺齋 50 回忌・即中齋 7 回忌)		利齋作
	羽子板香合			13 代利齋作
	桐木地糸巻オキエ砧香合			13 代利齋作
	桐木地ススキ砧香合			13 代利齋作
	青谷梅香合			利齋作
	桜蒔絵蛤香合			利齋作
	ミル貝蒔絵蛤香合			利齋作
	縞柿菊蒔絵扇面香合			利齋作
	縞柿萩蒔絵扇面香合			利齋作
	縞柿秋草蒔絵月形香合			利齋作
	桑菊蒔絵丸香合			利齋作
	桑藤蒔絵丸香合			利齋作
	蔦蒔絵丸香合			利齋作
	银杏香合	鵬雲齋好		利齋作
炭斗	不審菴伝来 唐物炭斗写			11 代一閑作
	葛桶炭斗 風炉用	元伯好	碌々齋判	14 代一閑作
	葛桶炭斗 炉用	元伯好		一閑作
	伝来元伯判へギ目神折敷炭斗写			14 代一閑作
	竹組タツマ炭斗	宗全好		11 代一閑作
	二枚重入子平炭斗	宗全好		13 代一閑作
	有馬製鱗形炭斗(大・小)	惺齋好	明治 42 年	内張 13 代一閑作

炭斗	菅籠炭斗	惺齋好	大正 14 年	14 代一閑作
	菽組炭斗 風炉用	惺齋好	昭和 4 年	14 代一閑作
	神折敷炭斗 庭山耕園蓬萊ノ画			11 代一閑作
	神折敷布張炭斗(大・小)			13 代一閑作
	神折敷炭斗(大・小) 松子ニ松葉ノ絵			14 代一閑作
	南洋製果物籠炭斗			内張一閑
	菊絵杉六角炭斗	惺齋好	昭和 5 年	13 代利齋作
	菊水置上杉神折敷炭斗	惺齋好	昭和 11 年	13 代利齋作
	三ツ独楽文木地炭斗			利齋作
炉縁	黒搔合せ炉縁	覚々齋好	即中齋判	利齋作
	銀唐松蒔絵溜炉縁	惺齋好		13 代利齋作
	桐蒔絵春慶炉縁	惺齋好	昭和 11 年	13 代利齋作
	シオジ玉モク炉縁			利齋作
	桜ノ木炉縁			利齋作
風炉先	桑乱桐透腰風炉先屏風	了々齋好		利齋作
	独楽透腰風炉先屏風	即中齋好		利齋作
棚	三木町棚〔本歌〕			
	溜竹台子	惺齋好	大正 8 年	14 代一閑作
	鏡朱及台子	即中齋好	昭和 37 年	14 代一閑作
	青漆爪紅丸卓	惺齋好		13 代一閑作
	青漆爪紅小卓	惺齋好		14 代一閑作
	溜旅卓	即中齋好		14 代一閑作
	桐三木町棚(江岑棚)	覚々齋好	覚々齋判	利齋作
	桐小卓〔本歌〕	吸江齋好		利齋作
	吹寄絵桐台子	惺齋好	大正 9 年	13 代利齋作
	五老松台子	惺齋好		利齋作
	五老松丸卓	惺齋好	大正 15 年	13 代利齋作
	桐木地高麗卓	惺齋好	昭和 3 年	13 代利齋作
	春慶桐旅篋筒	惺齋好	昭和 6 年	13 代利齋作
	桐糸巻透二重棚	惺齋好	昭和 10 年	13 代利齋作
	糸巻棚	惺齋好		13 代利齋作
	竹台子			14 代利齋作
	烏帽子棚			11 代利齋作
	桐木地丸卓			14 代利齋作
	桐木地四方棚			利齋作
	旅篋筒			利齋作

水 指	桐木地釣瓶水指		7 代利齋作
	溜塗菊絵曲水指		8 代利齋作
	菊絵曲水指		11 代利齋作
茶 器	小棗	元伯判	初代一閑作
	小棗	元伯判	初代一閑作
	折撓雪吹	覚々齋判	一閑作
	中棗	啐啄齋判	一閑作
	折撓狂歌棗	啐・齋好	10 代一閑作
	茶の湯には 梅寒菊に黄ばみ落ち 青竹枯木暁の霜		
	不識棗	了々齋好	11 代一閑作
	溜大雪吹	了々齋判	11 代一閑作
	尻張棗 了々齋朱書 詩あり		11 代一閑作
	夜桜ノ絵刷毛目黒中棗	吸江齋好	11 代一閑作
	溜平棗 風露新香隠逸花ノ文字	吸江齋好	11 代一閑作
	溜尻張棗 明歴々ノ文字	吸江齋判	11 代一閑作
	桐ノ画小棗	碌々齋好	12 代一閑作
	大棗 苺にけりなの句	碌々齋好	12 代一閑作
	京極棗	碌々齋好	13 代一閑作
	折撓 金銀桐ノ画黒大棗	碌々齋好	14 代一閑作
	芽張柳棗	碌々齋好	一閑作
	利休旧印張込棗	惺齋宗員判	12 代一閑作
	宝尽蒔絵黒大棗	惺齋好	13 代一閑作
	一葉桐蒔絵雪吹	惺齋好	大正 12 年 14 代一閑作
	トクサ蒔絵黒大棗	即中齋好	14 代一閑作
	内朱金砂子 芽張柳大棗	即中齋好	14 代一閑作
	折撓溜 乱菊ノ絵雪吹	即中齋好	14 代一閑作
	内朱ツボツボ大棗	即中齋好	14 代一閑作
	唐松蒔絵黒大棗	而妙齋好	15 代一閑作
	松葉松子蒔絵黒大棗	而妙齋好	16 代一閑作
	松唐草漆絵黒大棗	而妙齋好	16 代一閑作
	折撓乱菊朱画大棗		10 代一閑作
	張抜平棗		11 代一閑作
	金砂棗		13 代一閑作
	溜紅葉張込大平棗		13 代一閑作
	溜紅葉張込金林寺		13 代一閑作

茶 器	布張朱摺ハカシ大棗		14 代一閑作	
	唐松蒔絵黒大雪吹		14 代一閑作	
	溜折撓松ノ画棗		一閑作	
	吉野絵棗		一閑作	
	内秋草蒔絵平棗		7 代利齋(春齋)作	
	梅ノ絵中棗		9 代利齋作	
	木地中棗 内黒・溜 一双入 内溜ニ即中齋笹ノ絵		利齋作	
	桑大棗 夕顔蒔絵アリ		利齋作	
茶 杓	元伯宗旦作茶杓「一閑へ」	如心齋作写添ウ		
	元伯宗旦(咄々齋)作茶杓	伊勢五十鈴川杉ノ木ヲ以テ 筒ニ 手にふれて 清きをもしれ 五十鈴川 ふるきをうつす 杉の下枝を	飛来家所蔵	
	清巖宗渭作茶杓		飛来家所蔵	
	一閑張茶杓 啐啄齋筒			
	松竹茶杓 一双 梅筒		11 代一閑作	
	碌々齋茶杓 五本 五筒	明治 27 年	11 代利齋作	
		慈悲ノ嶋 霧ヶ峰 瀧ノ側ノ躑躅濁 塩竈ノ竹 銘「牛若」 星ヶ岡ノ櫻 「旦」ノ字 松島埋れ木 銘「羅漢嶋」 日光山ノ杉「あらたふと 青葉 若葉 日の光里」		
	若松蒔絵松ノ木茶杓	即中齋好	14 代利齋作	
	桜ノ木茶杓一双 銘「春風・秋色」	即中齋好	14 代利齋作	
	縁 高	金砂子猫足付縁高		12 代一閑作
		山道縁高	惺齋好	13 代一閑作
網絵縁高			一閑作	
食 籠	八角食籠	元伯好	11 代一閑作	
	朱二重八角食籠 (小)	了々齋好	11 代一閑作	
	八角食籠	了々齋好	14 代一閑作	
	折撓青漆爪紅丸食籠	惺齋好	13 代一閑作	
	折撓桃食籠	惺齋好	14 代一閑作	
	朱網絵食籠	惺齋好	14 代一閑作	
	芽張柳朱丸食籠	即中齋好	昭和 35 年 14 代一閑作	
	青漆朱網絵丸大食籠	而妙齋好	15 代一閑作	
	鱗鶴四方食籠	而妙齋好	平成 16 年 16 代一閑作	
	二重八角食籠		12 代一閑作	
	桐蒔絵溜食籠	惺齋好	昭和 12 年 13 代利齋作	

干菓子器	へギ目四方盆	元伯好		14代一閑作
	桜盆	覚々齋好		11代一閑作
	打合せ盆	了々齋好		一閑作
	独楽菓子器	吸江齋好		12代一閑作
	爪紅独楽菓子器	碌々齋好	明治41年	13代一閑作
	朱菓子盆	惺齋好		13代一閑作
	青漆爪紅独楽形菓子器	惺齋好		13代一閑作
	錆塗青海盆		惺齋判	13代一閑作
	溜四方菓子盆 紅葉張込	惺齋好		13代一閑作
	雲錦盆	惺齋好		13代一閑作
	銀婚式記念菓子盆 二枚入	惺齋好		13代一閑作
	青貝雪花四方盆	惺齋好		13代一閑作
	若松蒔絵独楽菓子器	即中齋好		14代一閑作
	惣菓子盆 利休所持ノ形ヲ以テ	即中齋好		15代一閑作
	青漆爪紅四方盆	而妙齋好		15代一閑作
	爪紅黒四方盆 松葉而妙齋画			一閑作
	糸巻形菓子盆 靈芝画			11代一閑作
	溜塗七宝菓子盆			11代一閑作
	元祖作写四方盆 コヨリフチ 二枚入			11代一閑作
	籠地入角四方盆 初代一閑二百年忌ノ節			11代一閑作
	七角内朱菓子器			11代一閑作
	内洗朱椰子菓子器			12代一閑作
	錆塗菊形菓子盆			12代一閑作
	大菱菓子盆			12代一閑作
	朱高杯盆 三ツ足			12代一閑作
	竹盆沈金釣人図			12代一閑作
	入角四方盆 ススキ蒔絵			12代一閑作
	折撓捻梅菓子盆			12代一閑遺作
	爪紅菓子器 神折敷炭斗形			13代一閑作
	家祖作正模 入角四方盆			13代一閑作
	六角銘々菓子器			13代一閑作
	色目塗二重木瓜形菓子器 惺齋菊ノ画			14代一閑作
	青漆爪紅四方盆			14代一閑作
	青漆爪紅四方銘々盆 五枚			14代一閑作
	青漆鏡朱独楽形銘々菓子器			14代一閑作
	和紙地四方盆			16代一閑作



干菓子器	八角桐木地菊絵菓子器	了々齋好		8代利齋作
	雪花蒔絵四方盆	吸江齋好	惺齋判	13代利齋作
	糸目独楽形菓子器	碌々齋好		利齋作
	鮎桶菓子器	碌々齋ヨリ到来ノ鮎桶ヲ以テ		利齋・一閑合作
	桐蒔絵四方盆	惺齋好	即中齋判	13代利齋作
	鶴亀ノ絵四方菓子盆	惺齋好	大正10年	13代利齋作
	蓬萊ノ絵桐銀縁青海盆	惺齋好	大正10年	13代利齋作
	銀雪花蒔絵桑四方菓子盆	惺齋好	昭和10年	13代利齋作
	春慶惣菓子盆 桐蒔絵	惺齋好		利齋作
	紅葉張四方盆			13代利齋作
硯箱	福祿寿青貝硯箱	惺齋好	大正9年	14代一閑作
	青貝鶴松毬硯箱			13代一閑作
	黄交趾硯石(妙全造) 南鐮一葉水入(淨益作)			
萆盆	丸萆盆	元伯好		13代一閑作
	手付木瓜形萆盆	元伯好		一閑作
	青磁鉢の子火入 筋煙管 如心齋好(淨益作)			
	粒足萆盆	如心齋好		13代一閑作
	黒漆爪紅糸巻萆盆	如心齋好		一閑作
	竹手付丸萆盆 瓢箪透	不昧公好		一閑作
	香狭間透し萆盆	宗全好		14代一閑作
	舟萆盆	宗全好		16代一閑作
	糸巻手付萆盆	惺齋好		14代一閑作
	日月鳳凰火入(正全作) 南鐮亀甲煙管(淨益作)			
	青漆むし萆盆	即中齋好		14代一閑作
	籠地別作 丸萆盆			12代一閑作
	南紀産とち萆盆 手 一閑	惺齋好	昭和3年	13代利齋作
	松ノ木鯨手糸巻萆盆	惺齋好	昭和6年	13代利齋作
	竹手付ツボツボ透萆盆	鵬雲齋好		利齋作
	神代杉萆盆			利齋作
	松ノ木行李蓋萆盆			利齋作
	桐木地舟形萆盆			11代利齋作

茶箱	利休形茶箱	大綱和尚筆「秋月 春花 乘雅興...云々」 十四代一閑作 茶筌筒 張拔建水 茶碗二種(永樂作) 薄茶器 茶巾筒	11代一閑作
	錆塗張拔茶箱	張拔黒茶碗・赤筒茶碗 茶器 茶杓 茶筌筒 茶巾筒	11代一閑作
	三景茶箱	惺齋好 惺齋好 宮島製楓形香合 惺齋好 アコタ茶器 銘 露知秋 宮島楓ヲ以テ(宗哲作) 刷毛目茶器 竹蓋惺齋好(正玄・正全合作) ヒタスキ茶碗・赤絵 茶箱茶碗(惺入作) 松島実竹茶杓	一閑作
南洋産	組物茶籠	茶器(籠) 茶碗二点(永樂染付、他) 茶筌筒 茶巾筒	内張一閑
	菊置上桐茶箱	惺齋好 御大典 昭和3年 笹絵白粉解茶器(中村宗哲作) 黒茶碗(樂惺入作) 金襴手鳳凰雲模様 替茶碗(永樂即全造) 竹茶杓 裏梨地(黒田正玄作) 桐唐草模様 建水(大西浄中作) 金箔叩塗ふり出し(一閑作) 折据 小(奥村吉兵衛作) 内溜塗寄白竹張 茶筌筒(正玄作) 南鐙七宝透 茶巾筒(中川浄益作) 網(土田友湖作)	13代利齋作
その他	軸盆		初代一閑作
	御釜敷 二葉	紹鷗好 籐組 利休好 藤組	10代一閑作
	丹頂鶴羽箒 左右		12代一閑作
	払子		柄 13代一閑作
	将棋盤		14代一閑作
	張拔 錆塗コーヒー呑		12代一閑作
	松ノ木卓 大小	惺齋好	大正3年 13代利齋作
	五老松卓	惺齋好	利齋作
	紅葉ノ木団扇形 薄板	惺齋好	昭和4年 13代利齋作
	羽子板一双	即中齋好	14代利齋作
	寄木卓		利齋作
	五老松花台	利休所持唐木ノ形ヲ以テ	利齋作

## 飛来家のこと

千家十職のなかで、一閑張細工を担当する家が飛来一閑家である。初代一閑は中国浙江省杭州の出身。杭州の西湖畔にある禅の名刹、靈隠寺の僧であったが、明末の騒乱を避けて、寛永年間(1624～44)、日本へ渡来。出身地、飛来峰ひらいほうからとった姓を名乗る。

大徳寺せいがんの清巖和尚の庇護のもと、表千家三代家元・元伯宗旦げんぼくそうたんのとりなしにより始めたのが、一閑張の茶道具製作。木地に和紙を張り、漆を塗る一閑張の雰囲気はわび茶の風趣に合い元伯の大いに好むところとなり、その指導を得て約 80 種に及ぶ茶道具を製作する。また、元伯の茶風を慕い茶を嗜むようになり、茶事に招く時は常に懐石なしの「飯後の御入来」で案内したところから、元伯より「飯後軒はんごけん」と軒号を与えられた。これより一閑張細工師として千家に出仕することになった。

五代一閑の代より茶釜をはじめ羽は箒ぼうき、露ろ地じ笠かさ、円座えんざなど種々の細工物や用具も取り扱う家となる。十代一閑の頃より通称を才右衛門、剃髪後に一閑を名乗るのがしきたりとなった。明治以降は十一代より十六代（当代）へと家業を継続している。

## 駒澤家のこと

千家十職のなかで、指物さしものの茶道具を担当する家が駒澤利齋家こまざわりさいである。当家は古くより、現在地、小川寺之内に住し、初代宗源は延宝年間(1673～80)、指物を家業としていた。二代宗慶、三代長慶の時代に元伯宗旦の指図を受け茶道具を製作するようになったと伝えられている。四代目は、指物の技術がすぐれていたので覚々齋の取り立てにより、千家出入りとなり剃髪後、「利齋」の号を与えられる。この人が初代利齋である。以後代々が、「利齋」の名を襲名するようになる。五代利齋は、表千家七代家元・如心齋じょしんさいを始め三千家それぞれに出入りをして家業は隆盛を迎える。竹の花入五十本を製作し、その形や銘の記録が現存している。この代より①の判を使い、箱に押すのが習わしとなる。七代利齋は、長寿に恵まれ、かつ、名工の誉れ高く、啐そったく啄さく齋、了々齋、吸江齋と表千家家元三代にわたり師事する。九代了々齋には、特に目をかけられ、駒澤家の玄関の土間にかかる暖簾「御茶器 さしもの師 駒沢利齋」の字は了々齋の筆になるもの。また、古稀を迎え、隠居するに際し、「少齋」の二字を与えられ、了々齋の書が軸として残されている。又、漆工としても高い技術を有し、「春齋」の号を持って、数多くの好み物を作り、駒澤家の中興のれんの祖といわれる。

明治以降は十一代より十三代へと家業を継承したが、十三代の没後、その妻が十四代として家業を守り抜いた。

現在は、十四代の甥、吉田一三が後見となり、その長男が十五代を継ぐべく修業を続けている。

※ 両家歴代のことや一閑張技法の詳細については、展示解説冊子(一部 1,000 円)に掲載しております。ご希望の方は 1 階受付にてお求めください。

## 飛来家歴代

初代一閑 明暦 3(1657)没	2代一閑 天和 3(1683)	3代一閑 正徳 5(1715)	4代一閑 享保 18(1733)
5代一閑 寛保元(1741)	6代一閑 延享 3(1746)	7代一閑 寛延 3(1750)	8代一閑 宝暦 3(1753)
9代一閑 天明 8(1788)	10代一閑 文政 13(1830)	11代一閑 明治 5(1872)	12代一閑 明治 30(1897) [当代]
13代一閑 大正 2(1913)	14代一閑 昭和 52(1977)	15代一閑 昭和 56(1981)	16代一閑

## 駒澤家歴代

初代宗源 没年不詳	2代宗慶 元禄 6(1693)没	3代長慶 貞享 3(1686)	4代(初代)利斎 延享 3(1746)
5代利斎 宝暦 14(1764)	6代利斎 享和 3(1803) (春斎)	7代利斎 安政 2(1855) (少斎・春斎)	8代利斎 弘化 3(1846)
9代利斎 文久 2(1862)	10代利斎 慶応 2(1866)	11代利斎 明治 35(1902)	12代利斎 明治 29(1896)
13代利斎 昭和 27(1952)	14代利斎 昭和 52(1977)		

## 表千家家元歴代

初代	利休宗易 抛筌斎 (ほうせんさい)	1522~1591
二代	少庵宗淳 (しょうあんそうじゅん)	1546~1614
三代	元伯宗旦 (げんぱくそうたん)	咄(咄)斎 1578~1658
四代	江岑宗左 (こうしんそうさ)	逢源斎 堪笑軒 1613~1672
五代	随流斎 (ずいりゅうさい)	良休宗佐 1650~1691
六代	覚々斎 (かくかくさい)	原叟宗左 流芳軒 1678~1730
七代	如心斎 (じょしんさい)	天然宗左 丁々軒 1705~1751
八代	啐啄斎 (そったくさい)	件翁宗左 1744~1808
九代	了々斎 (りょうりょうさい)	曠叔宗左 好雪軒 1775~1825
十代	吸江斎 (きゅうこうさい)	祥翁宗左 安祥軒 1818~1860
十一代	碌々斎 (ろくろくさい)	瑞翁宗左 碧雲軒 1837~1910
十二代	惺斎 (せいさい)	敬翁宗左 1863~1937
十三代	即中斎 (そくちゅうさい)	無盡宗佐 清友軒 1901~1979
十四代	当代 而妙斎 (じみょうさい)	宗左 1938~